方向

第八二号　一九八八年四月三〇日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

孤山雁信　－赤谷明海書翰集－　（二六）

原田憲雄編

★1968.11.8.原田憲雄宛。葉書。

過日の開眼法要にはおいそがしいところを態々お運びいただき有難うございました。不慣れなため行き届かぬ点の多かった事と思われますのに、早速にお礼状をいただき恐縮です。尚「広布」にまで御披露賜わり汗顔の至りです。いつまで続くか、現在のところ毎朝香を捧げています。おくればせながら御礼言上まで。十一月八日　学校にて

★1968.11.19.一別以来はや半月が経ちました。その後、霜がおり、木の葉はつぎつぎと落ちて、我が庭も冬らしい様相に移りつつあります。さざんかの花、柿の実の色どりがどうやら晩秋の景を支えています。今年は寒きの到来が早いようですが、老いの身にそう感じられるだけでしょうか。

写真三枚同封しました。大分ぼけていますが、三宝柑だけでも見てやって下さい。十一月十九日　明海　憲雄様

★1969.3.21.同宛。葉書。

昨日電話で四月五日御来遊願いたい旨申しあげましたが、当日は家内の登校日ですので、前日の四日（金）午後に変更さしていただきとうございます。もし貴兄の方で御都合が悪ければ御一報下さい。当日、奥様とお揃いで二時か三時頃お越し願います。いずれ拝眉の上万々　三月二十一日

★1970.9.2.同宛。手紙。過般の春日石仏めぐりでは歓深くあれもこれもと見て廻ったので相当疲れられたことでしょう。

写真機が故障だったらしく、全体にうつりが悪く、石畳の道を歩いている兄の姿も収めたのですが、さっぱりだめでした。どうにか見れる二枚だけ同封します。

あれから後、甥を連れて月ケ瀬の騎龍楼という古い旅館に泊りましたところ、六、七十冊に及ぶ宿泊者の揮毫帖や　多数の掛軸を亭主がもち出してきて読んでくれとのこと、草書が読めず、文人画は判らず、兄と山崎（慶輝）君を同伴すべきだったと悔まれました。又の機会に案内します。

いよいよ明日から授業開始、まだ自分の机になじめません。九月二日　学校にて　赤谷生　憲雄大兄

★1970.9.21.京都や奈良に雨が降っても伊勢田辺はとり残されて水やりに追われていましたが　いっときにものすごい雨がきました。庭の表土が流されて砂利を敷いたようです。お蔭で余計な仕事ができましたが　涼しくなったのは助かります。

奈良での写真たくさんお送りいただき有難く頂戴します。小生のと違ってなかなかよくとれています。

写真で思いつきましたが、長岡町に三菱製紙の現像所があります。そこの経営をしているのが、小生担任の卒業生の父です。人手を集めていますので、亜土君がアルバイトを兼ねて実習に利用すれば如何なものかと思いますが、その気があれば小生から当ってみます。何分大きな印画紙が存分にあるのでその点は取柄かと想像されます。

試験の採点でお忙しい由、明日からはお彼岸だし、時候の変り目ではあり、御無理なさらぬよう願います。御母

堂様の御健勝の程特に念じあげます。先は御礼をかねて。　九月二十日　明海　原田憲雄様

★1972.1.1.同宛。印刷年賀状。

★1976.7.22.同宛。葉書。

御一家皆々様御無事の由大慶に存じます。恭仁子嬢の御婚儀、知らぬこととは申せ失礼いたすました。ことほど左様に御無沙汰続き。家と学校と同じ道をたどることの繰返しで、それさえ大儀になって参りました。休み中あちこち借りを返しに廻りたいと思っています。庭の杉苔、大分芽ぶいてきましたが、まだ改築前の姿には戻りません。水のやりすぎか他種の苔に侵され勝ちです。末筆になりましたが　お酒有り難うございました。

★1977.7.27.同宛。葉書。墨書。

三伏とは朝昼晩三時に臥伏して銷夏すべき時節也右は小生秘蔵の辞書の説　今夏はこの説を服膺する覚悟、扨て過般は態々の御来訪、頂戴物までして恐縮、いずれ御礼に参上の積りなれど、何時になるやら、勝手の程お許し下さい

★1978.10.24.　先般参上大蔵経借用しましたのが六月の中旬、折角お借りしておきながらいまだ披見に及びません。あれから人のすすめで警察病院の整形外科で受診したところ三週間程入院せよとのこと、七月三日から八月十日まで病院暮しをしましたが　かえって歩けなくなってしまいました。腰の痛みは楽になりましたが　入院時に苦もなく歩けたのに退院時に歩けないとは皮肉な話です。帰宅しても正座、胡座、倚座すべて不自由、痛みから脱れるには寝るより仕方ないものですから、床に仰臥して読むには大蔵経は重すぎ、今まで手つかずといった

次第です。

ところで退院後、週一回通院受療服薬しながら今日に及んでいますが。だんだん回復に向い目下のところ。習字のための正座、椅子での読書が可成り出来るようになり。伊勢田駅までの往復にそう痛みを感じなくなりました。この調子ならば平癒の日も遠くないものと思いますし、又そうありたいと願っています。何にしてももう御懸念には及びません。

ふと目に触れた王珣の伯遠帖に「自以羸患志在優遊」の句があり「私は病気で弱っていますが何とか早くそちらへ遊びに行きたいと思っています」と解釈しましたが、それに誤りがなければ小生の優遊もちかく叶うことができそうです。

尚、同封しましたA、B二首の詩、いずれも鑑真の死を傷んでのもの、五言と七言の形式上の差はありますが、詩としての出来具合（文学的優劣）とか追悼傷心の溢れ具合といったものを合せて、ABいずれが優れているか、貴兄の評価を聞きたいと思います。別段急ぐ用件ではありません。何時になっても結構ですからお聞かせ下さい。作者名は敢えて伏せておきました。失礼ながら先入主が入らぬようにと思って。

以上此方のことばかりゴタクを並べましたが、このところ寒暖の差がはげしい頃とて風邪をひかぬよう家中皆様くれぐれも御用心の程願い上げます。目下、庭に花はなく虫害から免がれた柿の実が僅かに色づいているだけです。葉が落ちつくして実だけになる日も近いことでしょう。重ねて御安祥の程を。十月二十三日　赤谷生　原田憲雄様

（去る十月二日里内了徹先生御逝去、八十一才でした）

A　上徳乗杯渡　金人道已東　戒香餘散馥　戴炬復流風　月隠帰霊鷲　珠逃入梵宮　神飛生死表
　　遺教法門中

B　大師慈育契円空　遠遇伝燈照東海　度物草籌盈石室　散流仏戒紹遺蹤　化畢分身帰浄国・
　　娑婆誰復為験龍

★1979.1.1. 同宛。印刷年賀状。

★1979.4.26.同宛。手紙。封筒墨書。

毎年、三、四回風邪を引かぬと冬を過ごせなかった小生、今年は珍しく一度もひかないで春に逢えたと、吹聴していたところ、この吹聴が魔物、暖かくなってからやられました。「風邪を引かない」いうときっとひくものだと近所の人が云っています、そんなジンクスがあるようです。鼻腔→咽喉→気管支のコースが常例ですが、今度のは鼻の奥に居坐って動かず、医者の厄介になりながらもう半月は経ったでしょうか、俗にいう〃風邪の花〃まで唇に咲かせる始末でした。貴兄にも御用心を。

山茱萸の花に始り、白木蓮や、れんぎょうの花と、わが家の庭を色どってくれる花々を眺めながら、よくも今年の春に生命あってと喜んでいたものですが、風邪にかまけている間に、たちまち青葉の季節に入ってしまいました。『四分律』を椅子に坐って読む前に正坐をしながら習字のあとのひとときを、手許にあるあれこれの本の一齣ずつを味わうのがこの頃の日課。従って貴兄恵贈の『荘子伝』二十四節は三十四日かかってやっと今日、最後の頁に到り着いた次第です。

荘子について何の知識も持たぬ小生ながら、文章構成の巧みな組立てと会話体の平易で美しい表現に惹かれました。さすが長年の間の研鑽による含蓄と一艸舎や新聞社以来の錬磨による技法とが発露したものと感嘆しました。但し残念ながら荘子の思想となると門外漢の哀れさ、簡単に理解とは参りません、初めの間は、十八史略を学んだ中学時代の知識の残滓をひっかきまぜながら比較的すうっと進んだのですが、第十節辺からは首をひねり出しました。その辺からこそ貴兄の独擅場で、筆もいよいよ滑らかになるのですが…。表紙の帯に印刷された文には、「荘子の玄旨を直截に集約した入門・研究の書」云々とありますが、入門の入門書がなければ即物的な見方しか出来ない我々には難解です。二十二節に「おもしろかったかい」と荘周が聞くと、男の子、「おもしろくないよ」の男の子の如きものが小生で、さしずめ、貴兄は「ははは」と笑う荘子というところでしょうか。いったい、荘子哲学を通俗的に解明することが可能かどうか問題でしょうが、この『荘子伝』で用いられた表現法は大事にして下さい。実に気持のよい文章です。

貴兄、退職されてから一ヶ月、我々高校教師とは違い、日常生活には激変はなかろうと想像しますが、暮し方配慮の上、健康をそこねぬようくれぐれも御留意下さい。奥様お元気の事と思いますが、これまた御無理なきらぬよう御伝言願い上げます。四月二十六日　明海　原田憲雄様

★1979.7.18.同宛・葉書・

復啓　唐会要佚文の件で労を煩わし恐縮です。〃招提〃に関する未聞の説でしたので確かめておきたくなっただけ、急要の喫緊事でもなし、御心やすく放っておいて下さい。そのうちお訪ねして小生が捜すことにします。国

訳一切経律部四を龍大でコピーにしましたので急ぎ返却の要がなくなると抄録の作業が鈍ってきました。貴兄から借用の事は棚にあげて、勝手ながら悠々と怠慢の日々を送っています。〃月下美人〃の蕾が三つふくらみかけています、十日ほどすれば開くと思います。、その時連絡しますから見にきて下さい。七月十八日 .

同級会

1988.1.31.

原田慶

年の初めに小学校時代の同級会が持たれるようになって五年になる。私は二度目の出席だったけれど、石山寺の前という会場にもひかれて出席した。

五十才すぎて、〇〇ちゃんなどと呼びあっているのもおもしろい。戦後の五年余りの間、机を並べた人達だけれど、私は途中から転入したから気分が新鮮だったのか、他の人が知らないことを覚えていたりする。その代り、私の知らないこともある。

昨年の四月に、仲間の一人が亡くなった。今度の会合はその追悼を兼ねてということだったので、香典など立て替えてもらったものも、かえさなければならなかった。

一昨年、私が初めて出席した時には、その亡くなった人も来ていたが、今度はその時欠席だった人の顔が見えた。その人が、昨年暮れに、奈良から京都へ住居を移したというので、帰りは一緒に他の数人と石山寺へお参りして、電車で京都駅まで帰った。その人は亡くなった人と特に親しくしていたようなので、学校を卒業してから、

別のコースをとったはずなのに、どうしてそんなに親しくつきあうことになったのかたずねてみた。それは、亡くなった人の娘さんが、東京へ勉強に行っていた間、自分の夫の実家が東京なので、その家の離れの部屋に娘さんを下宿させてあげたからだ、とその人は説明してくれた。

なるほど、そんなことがあったのかと納得して別れたのであるが、家に帰ってからふと思い出したことがあった。一昨年の同級会の時に、その亡くなった人が、〃娘を東京へ勉強に行かせたが、学校のすぐ近くにある寮へ入れた。東京のはなやかさに馴れて、家に帰るのをいやがったら困ると思っていたが、寮では自分で何でもしなければならないのがつらかったらしくて、二年の期間がすんだらさっさとかえってきた。〃と私に言ったのである。

ひとり娘だったので、その同級会でも、どこかに婿養子に来てくれる人はないだろうかと言っていたが、その後、ちゃんとさがして娘を結婚させ、おなかに赤ちゃんができたのを見届けて、その同級生は亡くなったということである。そのことについて、

「あの人は不思議と急がはったな、娘さんは、まだ早いし嫌やと言わはったということやのに、妙に急がはったわ。やっぱり気がせいたんやろな。」

と言う人があると、

「急がんとこな、ゆっくりしょうな、うちも嫁さんをもらわんならんのやけど。」

と言う人がある。

それにしても、どうしてあの人は私にうそを言ったのだろう、友達の離れの部屋に下宿させてもらったのに、学生ばかりの寮に入れたと私に言った。疑ってみれば、あの人の言ったこともこの人の言ったことも、みんなどうだかわからない。そういえば、私の言っていることも、自分では本当だと思ってしゃべっているが。聞いている人は疑っているかもしれない。つきつめれば、何が本当なのか自分のことでもわからない。

下宿の話は、どちらの人の言ったことも、うそではなくて、どこかの部分をはしおっていて、二人がはしおった部分が異なっていただけのことかもしれない。二つの話をフィルムのように重ねてみれば、はしおられた部分が見えてくる。

一年に一度、出あって別れて行くだけの仲間なら、長い話は省略した方がわかりやすい。暗い話はかくしておくのが優しさだろう。

石山寺で、石燈籠に〃南無大師遍照金剛〃と彫ってあったので、話のついでに私が読んだら「あんたよう知ってるなあ。」と仲間の一人が言った。「え、なんで。」とびっくりしたら、「なんにも知らん、て言うてあほになっとかんと、若い人におこられるさけ、私らなんでも、〃知らん〃て言うとくんや。」と言った。その人は嫁さんや孫と暮らすしゅうとめさんだった。それは生活の知恵、処世術、と馬鹿にすることではなくて、心得なければならないことだと思う。ただ、できるだけ、互いに率直なのがいいなあと思ったけれど、自分がそうではないのに何も言うことはない。

私も、どんなに努力しても、自分の思うことを的確に、人に伝えられたと思ったことがないけれど、だれかの

いった言葉だけで全体がわかったと思うのは、象の尾にさわって、象とは細いひものようなものだというのと同じことなのだろう。ひとの話は、象がすっかり入るほど心を広く空しくして聞かないと、本当のことは聞こえてこないものだと思った。

来年は、京都に移った人と私とで、クラス会の世話をすることになった。これからはもっと心をからっぽにして、人の話が聞けるようになりたいと願っている。

錢鍾書『結婚狂詩曲』（囲城）

1988.4.21.　原田憲雄

荒井健・中島長文・中島みどり訳

一九五五年、荒井健「李賀の詩ー特にその色彩についてー」（『中国文学報』第三冊）を読み、次の言葉にぶつかった。

博学と智慧をもつて聞こえた錢鍾書氏は言う。「私はかねがね考えていた――（李）長吉の文章の根本原理は近視の人の視力と同様で、近くならば秋の動物の毛さえも十分見分けるが、遠くならば車一杯の薪も見つけることも出来ない。…」

錢氏の名を知ったのは、たぶんこれが初めてで、右の言葉が『談藝録』の引用であることも注で教えられた。それから十一年たった一九六六年、香港の影印重版本を読むことが出来た。一九七五年『李賀研究』第十二号に「二〇世紀の李賀　錢鍾書」を書いたが、同じ年、荒井氏は『飄風』第八号に「包囲された砦」を訳載する。

全九章より成るこの長編小説、原名は「囲城」。上海の文芸誌「文芸復興」に連載され、翌四七年五月、同じく上海の晨光出版公司から晨光文学叢書の一冊として初版発行。原作者の錢鍾書は江蘇省無錫の出身。日本ではほとんど知られていないが、中国近代文学史上注目すべき文学者のひとりたること疑いない。

『談藝録』からは想像もつかない、ふざけた皮肉な調子に、とまどった。だが読み進むと、オルダス・ハックスリーの『ポイント・カウンター・ポイント』やクリストファー・イシャウッドの『ベルリンよ、さらば』と似通った味わいがあるようで、面白くなってきた。第九、十、十一号と連載は順調に進み、インチキ博士の主人公が三人の女性の間でうろうろしはじめるところで、第十二号は休載。しかし一九八一年に出た第十三号には小説の第五回のほかに「錢鍾書先生を囲む懇談会」という記事が掲載された。前年秋、京都大学人文科学研究所で、荒井氏が司会し吉田富夫氏が通訳して約四十人が聞いた、錢氏の〃おしゃべり〃の録音である。氏の経歴が確かめられ、荒井氏との交際が語られてゆくうちに次のような話しもまじる。

この種の辞典（『中国文学家辞典』など）を編むということは、若い人が名を得たり、あるいは原稿料を得ようと思ったら、最もよい方法は現代の人の辞典、伝記に関する辞典を編むことなのです。というのは、彼らはあなたひとつ自伝をかいてくれと言い、写真を送ってくれと頼みまして、それをもらって発表し、原稿料は編集した彼等がもらうわけです。（笑声）

この諧謔は、例の小説の調子に通じ、ふざけた軽薄とみえるものも、詩経以来の諷刺にヨーロッパのヒューマニズムの結び付いたものかもしれぬ。いよいよ小説のさきゆきが気になるところ、連載は「今回でいちおう打ち

切ります。全訳は、荒井・中島長文共訳というかたちで、そのうちに単行本として出版される予定」と編集後記が告げていた。一九八七年になって、中島長文「『囲城』論――著者への手紙」と中島みどり訳「楊絳・銭鍾書と『囲城』」を並載する第十九号が出た。

「論」は、『囲城』が出版後、かなり反響を呼び版を改めたが、人民共和国成立以来一九八〇年に重版されるまで中国ではまったく無視されてきた事情を述べ、その理由として、「現代の中国の小説は素材からテーマまでを含めて、その大半が政治過程の中に収斂されてしまった」のに、『囲城』は「社会の容易には変化しない部分を描」いているので「抗戦もなければ革命もない、正面人物もいなければ明白な反面人物もいない。たよりないインテリがウロウロしたあげく結婚に破綻するというプロットしか見なければ」「国中が抗日戦に傾注している時期を舞台にこんなふざけた小説を書くとはどういうことかということになり、そういうひとたちは「この作品のおもしろさがユーモアがただのわるふざけとしか見えず、作品のもつ意味を見ようとしなかった」ためだろうという。

楊絳女士は銭氏の夫人で、その『幹校六記』も、さきに同じ訳者によって訳本が出、好評だった。このたびのも批評と伝記がうまく混じりあって、すぐれた作品となっている。

そうして今年二月、『結婚狂詩曲』と題を改め『囲城』の訳本の（上）が、三月には、（下）が出て、久しい渇を医やすことができた。

（上）には著者の「日本語版への序文」がつく。面目躍如たる名文だ。荒井氏の「あとがき」、（下）の中島

長文氏の「解説」もなかなかよく書けている。これらの諸文以上の批評も讀後感も、わたしには書けそうにない。

一九四六年に中国で書かれた小説を、四十年後の一九八八年の日本で読んでいて、いまの日本の大学の人事関係や男女の交渉が、そのまま写されているような感じがするのは、日本の社会が国際的になったためなのか、著者の典型を描く筆の老辣なためか。などと日本のぼけはじめた一書生が首をかしげるのを聞いたら、著者は「鼻くそ丸めてピィンと」やるだろうか。

隠　者

―富士正晴氏への手紙―

1972.11.1.

原田憲雄

丁重なお手紙を頂き有難うございました。毒の矢を抜く話は『三国志』の蜀の関羽の故事で、流れ矢があたり、一旦なおったけれど、雨が降ると疼くので医者に見せたら、矢尻の毒のせいだ、ほっておいたら腕をやられるというので、手術することになり、たまたま部下の将校と飲む約束をしていたので、飲みながら手術をしてもらったが、関羽は焼肉をさき盃をかたむけ「言笑自若」だったとあります。結果としては麻酔的効果もあったかもしれませんが、記事のねらいは関羽のいかにも豪傑だということを表現するつもりだったようです。富士さんから聞かれてみるとなるほどそういう見方もあるのだなと思いました。

隠者というのは中国でも日本でもなかなか面白い存在で、同じく隠者といってもピンからキリまであり、清俗高低さまざまです。ただこれまでわたしの目にふれたかぎりでは隠者についての解釈は、浮世はなれて悠々と、といった式のものが多く、中国文学や思想をやっている人でも、そういう目でしか見ず、現実逃避だなどと論じ

る人が多いようです。しかし中国で隠者生活をしようとすることは、役人になれる頭のある者が、役人の特権を放棄して、庶民と同じ税をはらい、兵隊にはとられ、勤労動員にも駆り出される生活を選び取るということで、そう楽なことではなかったはずです。竹林の七賢なんぞはいずれも大貴族でしたから、生活的にはそう苦労はなかったでしょうが、ああいう連中をのぞけば日雇労務者、農夫、大道易者、医者、まじない師、筆耕等々で食っていたようです。歴史家でも、（腹の中はともかく）書いているところでは隠者をのんびりしたゴインキョさんと思っているらしく、物が見えないな、と感じることがあります。こちらの見えないことは棚にあげて。

ききごろ竜女とおつきあいしていましたが、それがすんだので李賀に帰るつもりです。読みたいものは次から次へと出てきますが、一日は二十四時間しかなく、一年は十二月しかなく、当人、オヤジの死んだ年に近づきつつあり、だんだん面倒くさくなり、ノンビリできるものなら隠者になりたいものとあこがれています。わたしの知っているウシ年生れの人はみな豪傑ですが、富士さんと小林太市郎博士が、中でも大豪傑のようです。ヒツジというのはわれながらコセコセしています。

※前号正誤　二〇頁六行　sakro devanam indrah → śakro devānām indrah

※本号から「法華経巡礼」梵文中の ' ;: を ／ に ・ を ／／ に改めます。

十八　種種　雷震　動　　－法華経巡礼　14－　　1988.4.22.　　原田憲雄

カット原田道子

YAKŞA

前号は「天竜八部」と題したが、出てきたのは天・竜・キンナラ・ガンダルヴァ・アスラ・ガルダの六部で、あとの二部はまだだった。「天竜八部」という言葉は、妙本では「提婆達多品」に「そのときシャバ世界のボサツ、声聞、天竜八部、人と非人と」とあるのがその例で、他にはない。「大薩遮尼乾子所説経」「仏説観普賢菩薩行法経」などに「天竜は八部」の語はみえるが、八部が何を指すかはわからない。妙本に返ると「序品」のすぐ後のところや「譬諭品」「法師品」「神力品」「薬王品」「妙音菩薩品」「普門品」「勧発品」に天・竜・夜叉（ヤクシャ）・乾闥婆（ガンダルヴァ）・阿脩羅（アスラ）・迦楼羅（カルラ）・緊那羅（キンナラ）・摩睺羅伽（マホーラガ）とあるから、さきの六部にヤクシャとマホーラガを加えたものが天竜八部にちがいない。

ヤクシャはクベーラの配下とされる鬼神で拙稿「ランカーの岸辺で」に詳しく述べた。マホーラガは蛇の神である。この二部は正本、妙本だけではなく梵文の諸本にも、ここにはない。同じ「序品」のすぐ後に出るのだからここにも出しておけば整った感じがするのに、なぜだろう。

もっとも正本は、竜王はあるが、その八王の名は挙げない。しかも、どの梵本にも対応する言葉のない「来詣仏所。前稽首畢。退住一面」といった言葉が部衆ごとについている。

八部衆は、いずれも他の宗教から仏教に導入されたもので、その多くは鬼神であり、なかば悪魔扱いされていた。仏教に入って守護神とされたといっても、仏教徒のなかにもさまざまの人種・部族・階級出身の人がいたろうから、これらの神々に対する感情は一様ではなく、その差異が経典中での取り扱いにも反映しているかもしれない。創出の際ばかりでなく、翻訳の経過においても。

注目すべきは、神々が、仏教に導入されたことによって、異教におけるその神々とはまったく違った性格をもつようになったことであろう。

他教においては、この神々は、存在であり有であった。仏教は神々を導入したが、存在として有としてではなく、無常なる諸行として、人間の心が様々に描きだす幻のひとつとして、包摂したのだ。

幻は、永遠不変の存在ではない。永遠不変の存在でないことによって空である。空であればこそ、ひとの心をさまざまに動かし、幻を生み出させる。

幻の非存在であることを知るのはやさしいが、非存在であればこそ力強く、しつこく、人の心に忍び入り、幻想を生み出させ、世界を構築する。このことを悟るのは極めて困難である。

天竜八部の神々を、今日の知識人はたぶん、荒唐無稽の迷信と笑うことであろう。けれども、笑うその人が、国家や、法律や、党派や、学閥や、… といった幻想に振り回されているのではないか。むしろ幻の積極的な意味を見出し、幻の再編成を考えるほうがよいのではないか。『法華経』が、幻の神々を、人々が現実の存在として疑わない地上の国王の前に置いたのは、そのような理路を十二分に弁えてのことに違いあるまい。

1-17. また、マガダ国王でヴァイデーヒーの子であるアジャータシャトルも共にいた。

rājā cājātaśatrupā māgadhena vaidehīputreṇa sārdhaṃ //

マガダ国は、釈尊が『法華経』を説こうとしているグリドラクータの山を郊外にもつラージャグリハを都とし、当時おそらくインド最大の国である。この国は前五世紀の中頃ビンビサーラ王が統治していたのを、その息子の

アジャータシャトルが殺して、みずから位についた。この親子の悲劇が『観無量寿経』に描かれていることは有名である。彼はたえず侵略戦争をおこなったが、晩年の釈尊には帰依していたという。この席に参加した世俗の代表として名前が出た。正本は「ヴァイデーヒー」がなく「マガダ国王アジャータシャトルは十人の子と従者達と共に仏のもとにやってきてお辞儀をして一方に坐った。もろもろの天・竜・神や世間の人々で帰依しない者はなく、うやうやしく侍坐した」といい、妙本は「マガダ」がなく「ヴァイデーヒーの子アジャータシャトル王は数百千の従者と共に、仏足を頂礼し一方に坐った」という。梵本にくらべ丁重だが、妙本より古い正本がはるかに言葉が多いことに、注目しておこう。

一18. さて、そのとき、世尊は四衆に囲まれ、供養され、恭敬され、師事され、讃嘆され、歓迎され、歌讃され、崇拝され、「大きな教え」という法門、ボサツへの教示、諸仏の護持される広大な経典を語られ、そこで大法座に安坐し、「無量の教えの基礎」という三昧に入られた、体も動かさず心も動かさず。

tena khalu punaḥ samayena bhagavāṁś catasṛbhiḥ parṣadbhiḥ parivṛtaḥ puraskṛtaḥ satkṛto gurukṛto mānitaḥ pūjto'rcito'pacāyito mahānirdeśaṁ nāma dharmaparyāyaṁ sūtrāntaṁ mahāvaipulyaṁ bodhisattvāvavādaṁ sarva-buddha-parigrahaṁ bhāṣitvā tasminn eva mahādharmāsane paryaṅkaṁ ābhujyānanta-nirdeśa-pratiṣṭānaṁ nāma samādhiṁ samāpanno'bhūd aniñjamānena kāyena sthito' nitja-prāptena ca cittena /

四衆とは、一般にはビクとビク尼と男信者と女信者を指すが、『法華文句』では、仏に説法するようにしむけ

る「発起衆」、経を聞いて利益を受ける「当機衆」、仏の教化を助ける「影響衆」、理解はできなくても教えを聞く因縁を結ぶことができた「結縁衆」だとする。深い解釈とすべきであろう。

「囲まれ、供養され、恭敬され、師事され、讃嘆され、歓迎され、歌讃され、崇拝され」を妙本は「囲遶、供養、恭敬、尊重、讃嘆」とし、正本は「囲遶」だけで片付ける。インド人にとっては梵本のように重ねなければもの足らず、中国人にとっては妙本さえ煩わしいに違いない。信仰者の翻訳は、受け取る側の心理を考慮するから、原語の一々に対応する訳語を措くわけではない。以後、注意すべきものの外は触れなくてもよいだろう。

「大きな教え」を妙本が「無量義」と訳したのは、その内容が、後出の「無量の教えの基礎」と同じと解釈したうえでの、意訳であろう。後に『無量義経』のこととされ、さまざまの教義が派生する。今日では、両者が無関係であることが証明された。三昧とは「善心一所に住して動かず」と『大智度論』にいうように、集中統一した精神状態である。

1-19. すると直ぐそのあと、マーンダーラヴァ・大マーンダーラヴァ・マンジューシャカ・大マンジューシャカなど天上の花の大雨が降り注ぎ、世尊と四衆の上にまき散らされた。また、あまねく仏国土に六種の地震が起り、上下四方に震動し、はげしい動揺に陥れた。

samanantara-samāpannasya khalu punar bhagavato māndārava-mahāmāndāravānāṃ mañjūṣaka-mahā-mañjūṣakāṇāṃ divyānāṃ puṣpāṇāṃ mahat puṣpavarṣaṃ abhipravarṣat bhagavantaṃ tāś ca catasraḥ parṣado'bhyavakirat sarvāvac ca buddhakṣetraṃ ṣaḍvikāraṃ prakampitaṃ abhūc calitaṃ sampra-

calitaṃ vedhitaṃ saṃpravedhitaṃ kṣubhitaṃ saṃprakṣubhitaṃ //

マーンダーラヴァもマンジューシャカも色美しく香り高い天上の花で、見る者はおのずから悪業を離れ、天の神が意のままにこの花を雨のように降らせると伝える。

六種の地震とは大地が六通りに震動することで、正本は「六反震動」、妙本は「六種震動」という。六種とは、動(kampita) 起(calita)涌(vedhita) 覚(garjita) 震(kṣubhita)吼(ranita)で、各々にpra-(遍) saṃpra-(等遍)という接頭辞を伴って、十八種あるという。動は一方に動くこと。起は揺起。涌は涌出。以上三つは地動の相。覚は大声。震はごうごうと響く音。吼はほえる声。この三つは地動の声を指す。遍は四方に動くことで、等遍は八方に動くこと。別に、東涌西没、西湧東没、南湧北没、北湧南没、辺湧中没、中涌辺没の六を指すとする説もある。いずれにしてもこれらの基本は kampitaであり、kampita は動詞 kamp に由来する。kampは震える、戦慄するというほどの意で、物理的な動揺にも使うが、精神的な動揺の方向への使用が拡大する。anu-,saṃ-anu- などの接頭語がついて同情、共感、憐愍、眷恋のように用いられる。anukampaの語が強い響きをこめて『楞伽経』で使用されていることを「ランカーの岸辺で」において語った。『楞伽経』は『法華経』より新しいけれども、『法華経』の影響をうけている。ここでの六種震動が、はるかな道筋を経て、ラーヴァナの「哀愍」となったのかもしれぬ。

感動のないところに、ものごとは始まらぬ。六種震動は、天地の震動ではあるが、物理的震動よりは、天地のうちなるひとたちの精神的震動の方に力点がかかっている。釈尊の不思議な三昧をまのあたりにして価値の転

換がおこったのだ。このような震動は、体験したひとには説明はいらないのに、体験しないひとには説明しようのない、しても分からせようのないものなのであろう。

人との出会い、物との出会いは、日常たえまなく繰り返されているが、出会うと意識する間もなく忘れさるのがほとんどすべてであるなかに、会った瞬間、離れがたいものとなっている人があり、物がある。わたしにとって、李賀の詩は、そういうものだった。家庭には漢詩を読む者はいなかった。中学で漢文を習い、好きではあったが、それだけのことだった。偶然ぶつかった李賀の詩が、まったく理解できないものだったのに、とりつかれ、わけのわからぬ世界に引きずりこまれ、以来、たれから強いられたわけでもないのに、半世紀の付合いである。

友人、知人などとの付合いかたにも似た所があり、そのような付合いのなかでわたしなるものが育てられた。出会いの初めに六種の震動を感じたようなことは、稀だったにしても無いわけではなく、その時は意識しなかったにしても、振り返ってみて、あれが震動だったのだな、と気付く。

さて梵文テキストの0本だけがここのところで十数行多い。花の名に青蓮・赤蓮・白睡蓮が加わり、降り注ぐものは花の外にセンダン香とタカラ香の粉末が加わる。そうして六種の震動についていちいち「前方がもちあがり、後方がもちあがる。後方がもちあがると前方が落ち込む。南方がもちあがると北方が落ち込む、…」と説明し、pūrvā dig unnamati,paścimā dig unnamati, paścimā dig unnamati, pūrvā digavamanati ,dakṣinā dig unnamati, uttarā dig avanamati,- と続く音調は恐ろしい震動をそのままに伝え、総じて絢爛華麗な文章は、妙本以上にこの場面にふさわしいのではなかろうか。

1-20. そのとき、その集まりには、ビクとビク尼、信者と女信者、天、竜、ヤクシャ、キンナラ、マホーラガと、人と人ならぬもの、四大洲の王、小王、軍王など転輪聖王たちも従者を伴って列座していたが、みな世尊を仰ぎ見、不思議がり、未曾有のおもいがし、歓喜した。

tena khalu punaḥ samayena tasyāṁ parṣadi bhikṣu-bhikṣuṇy- upāsakopāsikā -deva-nāga-yakṣa-gandharvāsura-garuḍa-kiṃnara-mahoraga-manuṣyāmanuṣyāḥ saṃnipatitā abhūvan saṃniṣaṇṇā rājānaś ca maṇḍalino balacakravartinaś caturdvīpaka-cakravartinaś ca te sarve saparivārā bhagavantaṁ vyavalokayanti smāścarya-prāptā adbhuta-prāptā audbilya-prāptāḥ //

四大洲とはスメール（須弥）山の四方にある四大陸で、南のジャンブードゥヴィーパ、東のプールヴァヴィデーハ、西のアパラゴーダーニーヤ、北のウッタラクルを指し、四洲で全世界を現わす。軍王としたのは転輪王、すなわち戦車を運転する王の意だったのであろうが、やがて「輪」を天から感得した宝の車輪と見、武力をもちいず正義によって世界を統治するといわれた。天輪聖王は転輪王の強力なものである。

1-21. するとそのとき、世尊は眉間の毛の渦巻から一筋の光線を放たれた。光は東方一万八千の仏国土に広がり、すべての仏国土はアヴィーチ大地獄から世界の頂きまで、その光に照らされ、あまねく見通せた。

atha khalu tasyāṁ velāyāṁ bhagavato bhrū-vivarāntarād-ūrṇa-kośād-ekā raśmir niścaritā / sā pūrvasyāṁ diśy aṣṭādaśa-buddhakṣetra-sahasrāṇi prasṛtā/ tāni ca sarvāṇi buddhakṣetrāṇi tasyā raśmeḥ prabhayā suparisphuṭāni saṁdṛśyante sma yāvad avīcir mahāniraya yāvac ca bhavāgraṁ /

毛の渦巻は、白毫ともいい、白い羊毛のような一本の長い巻き毛で、眉間にあり、仏の特徴のいわゆる三十二相の一つとされる。仏国土とは、仏の教えのおよんでいる範囲。アヴィーチは、阿鼻と音写し、無間と意訳し、八大地獄のうち最低の位置にあり、ここに落ちた亡者は間断なく苦しめられるから無間といい、絶えず叫喚するので焦熱地獄ともいう。八大地獄は、八熱地獄ともいい、①等活。鉄棒や刀で殺しては甦らせ苦しみを続かせる。殺生の罪人が堕ちる。②黒縄。熱鉄の縄で縛る。③衆合。葉が刀でできた林に追い込み鷲などに攻めさせる。盗賊や邪婬の者が堕ちる。④叫喚。熱湯や大火で攻める。殺人や飲酒者が堕ちる。⑤大叫喚。人間の八百年が化楽天の一昼夜で、化楽天の八千年がこの地獄の一昼夜とされ、妄語などの罪人が堕ちる。⑥焦熱。⑦大焦熱。⑧無間。五逆、謗法の者が堕ちる。存在世界の最低所である。世界の頂きは、有頂天とも、色究竟天ともいい、存在世界の最頂。

1-22. その仏国土に六道の衆生のいるのがことごとく見えた。またその仏国土に現におられる尊い諸仏が見えた。これらの諸仏の教えもみなことごとく聞こえた。またその仏国土にはビクとビク尼、信者と女信者、ヨーガ行の行者で果報を得た者と得ない者のいるのがことごとく見えた。またその仏国土にボサツ大士できまざまの聴聞の因縁や、信解、巧みな方便によりボサツの道を修行しているのがことごとく見えた。またその仏国土に寂滅した尊い諸仏のおられるのがことごとく見えた。またその仏国土に寂滅した尊い諸仏の宝玉製の遺骨塔のあるのもことごとく見えた。

ye ca tesu buddhakṣetreṣu ṣaṭsu gatiṣu sattvaḥ saṃvidyante saṃ te sarve'śeṣeṇa saṃdṛśyante

sma / ye ca teṣu buddhakṣetreṣu buddhā bhagavantas tiṣṭhanti dhriyante yāpayanti ca te 'pi sarve saṃdṛśyante sma / yaṃ ca te buddhā bhagavanto dharmaṃ deśayanti sa ca sarvo nikhilena śrūyate sma / ye ca teṣu buddhakṣetreṣu bhikṣu-bhikṣuy-upāsakopāsikā yogino yogācārāḥ prāpta phalāś cāprāpta-phalāś ca te 'pi sarve saṃdṛśyante sma / ye ca teṣu buddhakṣetreṣu bodhi-sattvā mahāsattvā aneka-vividhāśra-yapāraṃbapādhimukti- hetu-kāraṇair upāyakauśalyair bodhi-sattvacaryāṃ caranti te 'pi sarve saṃdṛśyante sma / ye ca teṣu buddhakṣetreṣu buddhā bhaga-vantaḥ pariniryṛtās te 'pi sarve saṃdṛśyante sma / ye ca teṣu buddhakṣetreṣu pariniryṛtānāṃ buddhānāṃ bhagavatāṃ dhātustūpā ratnamayās te 'pi sarve saṃdṛśyante sma //

六道は、六趣ともいい、衆生が業（意志にもとづく生活行為）によって輪廻する六種の世界、すなわち地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上である。

仏国土は、初め一仏一国土とされ、仏は釈尊、国土は人間世界が意味されていたが、仏についての考えが時間的にも空間的にも拡大し、やがて無数の仏国土が説かれた。各々の国土はそれぞれの仏の教えに従っているが、仏と仏の間には障害はなく融通していて、一つの仏国に入ればすべての仏国が見通せる。ふしぎなようだが、平凡なわれわれの経験でも、一つのことが分った瞬間に、分らなかった他のことが判明するといったことがある。この一節、後世のものながらフランソワ・ヴィヨンの『遺言詩集』の中で老婆が「天国には、琵琶や竪琴。地獄には、罪の亡者が煮られて居ります」と歌うのが連想され、うっとりするほど美しく、わたしには感ぜられる。